

## 実践まとめシート（２年次）

研究グループ	地域と協働	実践グループメンバー	工藤、米持、附田、手塚
--------	-------	------------	-------------

実践タイトル			
『高等部における「生徒たちがプロデュースした地域の中にある作業学習」の実践』			
<p>I 問題と目的</p> <p>昨年度、地域と協働グループの話し合いで、高等部生徒は卒業後に地域で生活したり、働いたりするが、高等部の作業学習はこれまで地域資源を活用していたが、生徒の学びへの効果が十分に検証されていないことが課題として挙げられた。その中で、地域の方に依頼されて頼りにされる場面や、返品されるなどうまくいかない場面もあっていいのではないかという意見があり、生徒たちはいろいろな働き掛けの連鎖があって成長している、そのような地域とのつながりの中で学びを広げ、深めているのではないかと考えられた。</p> <p>昨年度、サービスチームの調理班がカフェ イリスから招いた講師と、①オリジナルスイーツの考案、②調理の指導、③ラッピングの検討と続けて3回の授業を行った。生徒たちは自分たちの考えたスイーツが商品になるというやりがいを感じることができていた。継続して教えてもらうことで、お互いの信頼関係が徐々に深まったように感じられた。</p> <p>この作業学習の実践を通して、地域の方から教えてもらう機会を設定することで、高等部生徒たちの学び意欲がより高まるのではないかと考えた。また同時に、地域の方の特別支援学校に在籍する生徒への印象や意識が変化するのではないかと考えた。</p> <p>今年度は、プロダクトチームの木工作业において、木村木品製作所から招いた講師と、3回の授業を実践することにし、授業後の講師へのインタビューと、生徒たちの授業の様子や発言、作業日誌での振り返りなどから、生徒たちの学びを検証していきたいと考えた。また、昨年度にサービスチームの調理班の外部講師だったカフェ イリスから招いた講師にもインタビューを行い、特別支援学校に在籍する生徒の学ぶ姿や印象などを尋ねることとした。</p>			
II 実践方法			
<p>1 対象生徒・学級・学習グループについて</p> <p>高等部作業学習は、プロダクトチームとサービスチームの2つのチームがある。プロダクトチームには農作業と木工作业、陶芸作業を行う班があり、サービスチームには清掃作業と喫茶、フードデザインを行う班がある。今回の対象生徒は、プロダクトチームの木工作业班の1年生1名、2年生2名、3年生2名の5名である。糸鋸盤やベルトサンダーなどの機械を使って木材を切ったり削ったりすることができる生徒、鉋や補助具などの道具を使って箸の形に削ることができる生徒、タイマーで時間を決めることで一定のペースでやすり掛けを続けることができる生徒などである。各作業を役割分担しながら継続して行うことで、技術が少しずつ身に付いてきている。製品としては、木べらやスプーン、箸、ペン立て、コースターがある。コロナ禍ということもあり、製品の販売の機会は学習発表会での保護者への販売に留まっている。製品の改良は保護者からの感想をもとに行ってきた。</p> <p>2 実践の手続き</p> <p>木村木品製作所から招いた講師と、3回の授業を行う。3回の授業は以下のとおりである。</p> <p>(1) 木村木品製作所の紹介と「りんごの木のバターべら製作キット」でバターべらの作り方を教えてもらう。</p> <p>(2) 普段の作業学習を見てもらい、アドバイスをいただく。</p> <p>(3) 新しい木工製品を検討する。</p> <p>検証方法として、ビデオカメラで授業を撮影し、生徒の様子を観察する。生徒の授業での発言をICレコ</p>			

ーダーで記録し、作業日誌の振り返りの記述とともに分析する。3回の授業後に、生徒たちと授業の振り返りと、講師にインタビューを行う。また、昨年度3回の授業をしていただいたカフェ イリスから招いた講師にもインタビューを行う。二人のインタビューを比較して、分析する。

### Ⅲ 指導の実際

#### 1 木村木品製作所の紹介とりんごの木のバターべら製作（7月12日）

1回目の授業の前半は、講師による自己紹介と、木村木品製作所で作った製品がどんな場所で使われているか説明をもらった。普段、自分たちが利用している商業施設にも納品されていることを知って、驚いていた。生徒たちの記録では、「板を乾燥。乾燥が一番大事」と講師が強調して話していたことをメモしていた生徒（B）や、「最初は外で乾かして、サウナみたいなところに入れる。テーブルや椅子を作っている。（会社に入社してすぐの人は）小さいものから商品作りしていく」と要点を押さえてメモしていた生徒（D）がいた。



また、講師に「杉の木を使って製品を作るときには、どのくらいの品質の良い製品を作らなければなりませんか」と質問した生徒（A）がいた。その質問に講師は「柔らかい木はちゃんと仕上げないと、木のささくれみたいのが出やすいので、自分の手で触ってもそんな感じが出ないくらいまで、つるっと仕上げなきゃいけないかなと思います」と回答されていた。質問した生徒（A）は講師の回答をメモしていた。

授業の後半は、「りんごの木のバターべら製作キット」でバターべらの作り方を教えてもらった。最初から積極的に講師に仕上がり具合を尋ねる生徒、講師に話し掛けることが難しく教師に何度も確認する生徒など、様子は様々であった。積極的に講師に話し掛ける生徒がいたことにより、他の生徒も徐々に講師に話し掛けるようになった。作業や完成した製品を通して、講師との交流が深まっていくのを感じた。授業の振り返りでは「りんごの木のバターべらを作りました。つるつるに仕上がりました」と書いた生徒（C）、



「コツやこをやった方がいいよと優しく教えてくれました」と書いた生徒（D）、「いろんなことを教えてもらって、作業したときとても楽しかったです」と感想を書いた生徒（B）がいた。

#### 2 普段の作業学習での作業へのアドバイス（7月14日）

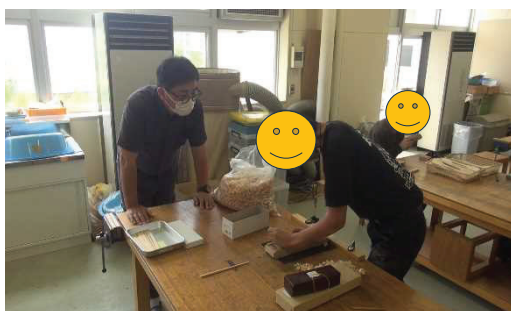
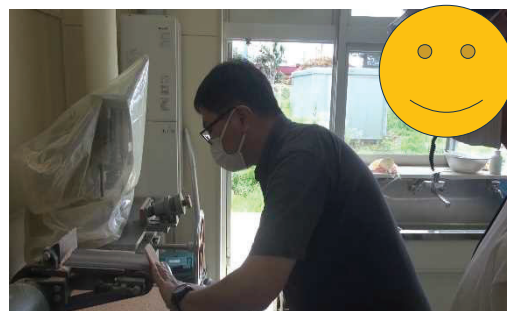
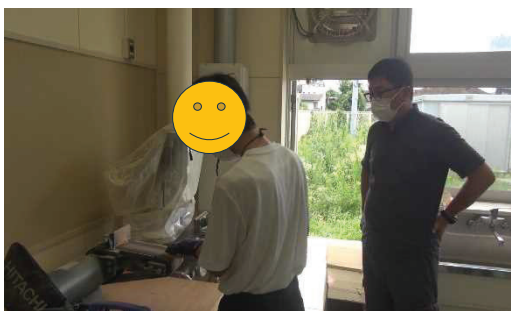
2回目の授業は、講師に糸鋸盤での木べらの型取り、ベルトサンダーでの木べらの成形、補助具と鉋を使った箸の成形、ペン立てのやすり掛けの作業を見てもらい、アドバイスをいただいた。

糸鋸盤での木べらの型取りでは、切断面が垂直であることを褒めてもらった上で、杉の年輪の夏目と冬目の間隔に着目して、その間隔が狭いと木が堅くなり、糸鋸の振動が大きくなるので、ゆっくり動かすようにアドバイスをいただいた。また、振動して材木が浮いていたので、糸鋸盤のテーブルに吸い付ける形でゆっくりと移動させると良いと教えてもらった。ベルトサンダーでの木べらの成形では、手本を示してもらいながら、かき混ぜやすいように先端部分を曲面にすることや柄の部分に丸みを付けることを教えてもらった。補助具と鉋を使った箸の成形では、材木となる木の色に着目して、同じ色で揃えるようにすることや、鉋掛けのときには手に体重を掛けて削るよう、アドバイスをいただいた。

振り返りで、糸鋸盤での木べらの型取りでアドバイスをもらった生徒（B）は、「今日は教わって、すごく分かりやすかったし、糸鋸で板が浮いていたところを直したいです」と作業日誌に書いていた。ベルトサンダーでの木べらの成形でアドバイスをもらった生徒（A）は、「ベルトサンダーを使って、へらの裏の角や



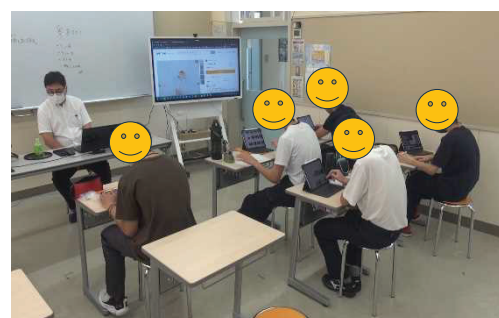
持ち手の上を削ることを教えてもらいました」と書いていた。箸の鉋掛けのアドバイスをもらった生徒（D）は、「次からはもっと強く鉋（掛け）をやりたいです」と書いていた。ペン立てのやすり掛けをしていた生徒（C）は、「集中良かったです。おしゃべりせずできました。」と書いていた。



### 3 新しい木工製品の検討（7月19日）

3回目の授業は、より多くの人に買ってもらえるような製品はどのように作ればよいか、生徒自身が考え、いろいろなアイデアを出すようにした。講師は「買う人がこれいいなって感じてくれる、感じてもらえる何かがなければいけない。使いやすいとか、かっこいいとか、かわいいとか。自分たちで工夫して、いっぱい買ってもらうためにはどうしたらいいか考えてもらえればと思います」と話し、職人が作った製品を紹介するホームページから、パン皿やサラダボウル、りんごの木を使った製品など様々な製品を見せていただいた。

生徒たちのアイデアとして、耳かきやへら、お盆、ハンガー、ティッシュの箱を考えた生徒（D）、箸箱や小物入れ、花びらマグネット、富士山（岩木山）の箸置きを考えた生徒（A）、パン皿や文具トレイ、調理へら、スプーン、まな板、箱ティッシュケース、薬さじ、ペン&時計置きを考えた生徒（B）、歯ブラシスタンドや木材を使ったカレンダー、小さな子供用のままごとセット、ドアに掛ける看板、木の臼などを考えた生徒（E）がいて、たくさんの製品のアイデアが出た。一方、製品のアイデアを出すことが難しかった生徒（C）があり、「考えるの



が難しかった」と振り返りで書いていた。

最後に、講師から、これらの製品を作る上で必要な加工技術や塗装技術の話、製品の大きさや寸法を具体的に考えると良いことを補足していただいた。

#### IV 結果

##### 1 3回の授業の振り返り（8月28日）

夏休み明けに、講師の3回の授業のビデオを見ながら、振り返りをした。以下の4つの項目で生徒たちに質問をした。なお、生徒Eは1、2回目の授業は欠席し、3回目の授業だけ参加した。

- （1）特に印象に残っていることは何ですか。
- （2）どんなことを学びましたか。
- （3）これからどんなことをがんばろうと思いましたか。
- （4）作業班で、地域のためにしたいことがあれば書いてください。

生徒たちの回答を表1に示す。

表1 講師の授業の振り返り

質問\生徒	A	B	C	D	E
（1）特に印象に残っていることは何ですか。	木工作业を見てもらい、ベルトサンダーを使ってへら作りのアドバイスをもらったこと。	バターべらの製作が楽しかった。	バターべらの製作が楽しかったです。	新しい物を調べるのが楽しかった。	すりごま（の臼）とか、まな板を作ろうかなと思いました。
（2）どんなことを学びましたか。	製品が完成したときに、杉の木がつるつるになっているか確認すること。 ベルトサンダーを使って、へら作りのへらの表と裏のそりがあるように削ることと持ち手の部分を丸くすること。 新しい木工製品のアイディアを考え、設計図を書くこと。	糸鋸で、ドドドって動かないように、強く下の台に吸い付く感じで押し付けること。	やすり掛けを時間いっぱいがんばりました。	鉋に体重をかける。	ホームページとかで、製品を見ながらアイディア（を出すこと）を学びました。
（3）これからどんなことをがんばろうと思いましたか。	やすりがけで製品が完成したときに、杉の木がつるつるになっているか確認すること。 ベルトサンダーを使って、へらの表と裏のそりがあるように削ることと持ち手の部分を丸くすること。	糸鋸で下に吸い付くような感じになるようにがんばりたいです。	やすり掛け上手にやりたいと思いました。	滑らかなへらをはがりたいです。	丁寧に作業して、良い製品にする。
（4）地域のためにしたいことがあれば書いてください。	弘前大学や弘前市の観光館で、作業学習で作った木工製品を販売していきたいです。	お皿を作って提供したい。 学校で販売イベントがあればよい。	ペン立てとかへらを学校の近くで販売したいです。	販売行事があれば販売したい。	地域の人に作ってほしい物とか（聞いて）、販売とかしてほしい。

生徒（A）は、自分が中心となって製作している木べらの糸鋸盤やベルトサンダー、やすり掛けなどの作業でアドバイスをもらったことが印象に残っていることが分かった。ベルトサンダーでそりがあるように削ることや持ち手の部分を丸くすることを2回書いており、その後の作業においても意識している様子が見られた。

生徒（B）は、糸鋸盤で木べらの形に切るときに、木材が振動しないよう台に吸い付くように押し付けて作業したいと意欲を示し、その後の作業でも意識しながら行っていた。最近、ベルトサンダーの作業にも挑戦したいと話し、生徒（A）からやり方を教えてもらい、自分の木工技術を高めようとしている。

生徒（C）は、新しい木工製品のアイディアを考えることは難しかったが、自分が一生懸命やすり掛けしているペン立てやコースターの作業を見てもらい、時間いっぱいがんばったことを振り返っている。また、同じやすり掛け作業のバターべらの製作が楽しかったと書いていることから、教師だけでなく、多様な他者から、多重に評価されることが、生徒たちの学ぶ意欲につながっていくのではないかと考えられた。

生徒（D）は1年生で、本校での木工作業の経験はまだ少なく、タブレット端末で新しい木工製品を調べることが楽しかったと振り返っている。学んだこととして、鉋で箸の形に削るときに、体重をかけることを書いていた。その後の作業では、しっかりと鉋に体重をかけるように作業する姿が見られ、木工技術が高まってきた。

生徒（E）は、3回目の授業だけの参加であったが、新しい木工製品のアイデアをたくさん出していた。これからどんなことをがんばろうと思うか尋ねた項目で、丁寧に作業して良い製品にすることを挙げていて、次の質問で「地域の人に作ってほしい物を聞いて、販売がしたい」と答えており、「なぜ」「何のため」という目的意識が見られた。

## 2 二人の外部講師へのインタビュー

今年度授業を一緒にしてくださった木村木品製作所から招いた講師と、昨年度授業を一緒にしてくださったカフェ イリスから招いた講師にインタビューをした。質問項目は以下のとおりである。

（1）特別支援学校の生徒の学ぶ様子をどのように見ていましたか。

- ・特に印象深かった場面はありますか。どんなところからそれを感じたのでしょうか。

（2）特別支援学校の生徒に情報を伝えるときに、特に注意したり気に掛けたりしたことはありましたか。

- ・伝え方は、他のところでやるときのやり方と同じですか。

（3）特別支援学校と地域とのつながりについてどのように考えますか。

- ・もっと深めていくにはどんな手立て、アプローチがいいと思いますか。

（4）特別支援学校の生徒に情報を伝えたときに、どんなことを特に印象強く感じてくれた、学んでくれたと思いますか。

- ・実際に教えてみてどう思いましたか。通常の学級の子供たちに伝えたときの感覚や、学んでいるイメージは同じですか、違いますか。

（5）特別支援学校の生徒たちが地域とつながりながら学ぶことについて、思うことはありますか。自由に教えてください。

インタビューの回答を表2に示す。

表2 インタビューの回答

質問	外部講師（木村木品製作所）	外部講師（カフェ・イリス）
（1）本校（特別支援学校）の生徒の学ぶ様子をどのように見ていましたか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基本的には、最初見た感じから本当に<u>素直</u>で、結構木の物を作るのが好きだという感じでやっている。そういう空気感をすごく感じたので、本当に<u>素直</u>に学んでくれるのだろうというイメージで、授業を進めたという感じです。</li> <li>・<u>集中</u>して、そのものに<u>集中</u>している感じがすごくしましたし、最初声を掛けてこなかったですけど、だんだん声を掛けてもらって、業界のものとして<u>敬意</u>を払ってもらっているような感じがしました。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・3回（授業を）やったと思うのですが、でも、すごく<u>真剣</u>に取り組んでいる中で、楽しんでいるなっていうのがすごく伝わっていました。授業とかだと、一方的に受けるとかではなくて、自分たちが参加しているという姿勢もあって、本当にいいなと思って見ていました。</li> <li>・最初にどういうものを作っていくか形にしていくながら本当に一番ワクワクしました。私もワクワクしたし、みんなの様子も、いろんなこと出してくれて、いろいろ探す中で、そこが何か良かったなって思いました。ある程度形にしなければいけないのは最初に分かっていたので、やりやすさと美味しさっていうのは意識しながら話したなって思いますね。</li> </ul>
（2）本校（特別支援学校）の生徒に情報を伝えるときに、特に注意したり気に掛けたりしたことはありましたか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基本年齢関係なく、その子と<u>対等</u>に付き合うというか、小さい子だからというふうに見ないで<u>対等</u>に接しています。ちょっとした<u>アーティスト</u>と接しているような感じでいつもやることで、その子のする気持ちとかそういうのを大事にしています。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・普段教えたりとかするときには、なるべく否定的な表現を使わない方が伝わるなって思っているの、なるべくそこは意識したかなって思いますね。スムーズに取り入れられるように話したいなっていうのもできたかは別にして、意識していたと思います。</li> <li>・ただ教えるっていうより、<u>何かを生み出す</u>ときって、一番自分が大事にしているのは、やっぱりワクワクしないと何でも楽しくで</li> </ul>



		<p>きないので、そこだけは一緒にやりたいなと思ったので、一方的にこれやりましょうっていうよりは、一緒にこういう気持ちを上げていく。そこを私は一番大事にしたいと思います。</p>
<p>(3)本校(特別支援学校)と地域とのつながりについてどのように考えますか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・僕自身も、支援学校のある場所を今回初めて知ったぐらいで、そんなに遠いところでもないのに知らなかったということで、もっと地域活動とか PR というか、いろいろ一般の方に向けた何か取り組みをされてもいいのかなと思います。</li> <li>・結構されているところはされているだろうと思うのですが、いろいろ作ったものの販売とか、もっともっと一般の方が買いに来るようなところとするようなイベントというか、そういうのをされてもいいのではないかなと思いました。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・つながっていくべきだなって思っています。そして、今わりと困っている保護者の方も多いと感じています。地域の小学校でもいろいろな話を聞くとときに、本当に困っている人がいっぱいいて、地域と支援学校が協力してやっていくべきだなというふうに思います。</li> <li>・もっと地域の人を知ってほしいし、知るべきだし、協力して一人一人のもっているものを伸ばすという、そういうのが(特別支援学校は)すごいなって思っていました。</li> <li>・お菓子を販売したり、絵を見てもらったり、その一つ一つの発表の場というか、そういうことを地域の人を呼んでする、あるいは反対に出ていくというのもいいなと思っています。</li> </ul>
<p>(4)本校(特別支援学校)の生徒に情報を伝えたときに、どんなことを特に印象強く感じてくれた、学んでくれたと思いますか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・木の物の業界の人だということで、若干尊敬してもらっている、敬意の念を抱いていたような気配を感じていましたので、僕とすればできる限り、こうすればいいというか、ピンとくるようなアイデアみたいなものが言えればいいなと思っていますし、生徒さんたちもそういうのは何か掴もうという気持ちはすごい感じました。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本当にみんなが楽しんでやっていると伝わってきていて、注意することを復習してくれるので、みんなそこをきちんと気を付けてながらやっていたので、なんかいいなと思っていました。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・実際に教えてみてどう思いましたか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・集中して見てもらっている感じをすごくしましたので、本当に見てもらうことがやっぱり一番。今、手取り足取りいろいろしなきゃいけない時代なのかも分からないですけども、自分で見て感じるというかそのような気配はしました。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・好奇心も旺盛だし、前向きな子たちだなんていう印象で、やったことも楽しんでやっているように映っていたので、私も嬉しくなりました。中学生を職場体験で毎年受け入れるのですが、その子たちに教えるのとなんか変わらないように感じていて、本当に言ったことを素直にできる子たちだと思ったので、そこが良かったです。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・通常の学級の子供たちに伝えたときの感覚や、学んでいるイメージは同じですか、違いますか。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あまり変わらないと思います。僕が経験した中では、全然思ったより皆さんスマートで、ちゃんとしている感じがしますね。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・同じですね。本当にその子たちも中学生とかも素直な心、一番大事なものは素直な心。それがあればいろんなことを吸収する力がすごく、知っているからっていう姿勢だと入るものが何も入っていかないので、そういう姿勢が印象的だし、それが一番大事だよなって教えているときは思いました。</li> </ul>
<p>(5)特別支援学校の生徒たちが地域とつながりながら学ぶことについて、思うことはありますか。自由に教えてください。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・同じものを何十回とか何個も製作されているので、そういうのも大事なのかなと思うんですけど、もちろん自由にいろいろなものを作ってもいいのではないかなと、ちょっと感じました。</li> <li>・作った物をみんなどう思うのかとか、そういうリアクションとか評価とかあると、またそれがやっていくことにつながるので、そういう発表の場とか、何か販売の場とか、一般の人の販売の場で、ちょこちょこ何かできるような、そういうのを体験させるのがいいのではないかなと思います。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特別支援学校に対するイメージが昔よりはいいとは思いますが、まだどこかでイメージはどうなのかなと思うときがあります。でも、本当は素晴らしい能力をもっている人たちだから、そこに価値を認められるような生き方があればいいなと思います。</li> <li>・みんながつながっていて動いているということをお互いに知る。本当につながってほしいなと思います。</li> <li>・この子たちのことを地域の人も分かってもらって、良さですね。全く関わっていないのに、イメージで思われるよりであれば、実際に会って関わってどうなのかというのを、体験してもらえた方がイメージとしては変わってくるのかなと。1回、2回とか、3回とかというよりも、時系列でというか、その方が成長もより分かりやすいのかな、お互いに。</li> </ul>

本校生徒の学ぶ様子の印象について、「素直」、「集中」、「真剣」、「参加」、「敬意」という言葉がキーワードとして挙げられる。地域の専門家から積極的に学ぼうとする生徒たちの姿勢が、良いイメージにつながっ

たのではないかと推察される。

本校生徒に情報を伝えるときに、特に注意したり気に掛けたりしたことがあったかという問いには、「対等」、「一緒に」という言葉が挙げられ、上下の関係ではない横の関係を意識しているように感じられる。「アーティスト」や「何かを生み出す」という表現からも、何かを共に創り出していこうとするイメージが思い浮かぶ。

本校と地域とのつながりについてどのように考えるかという問いに、「初めて場所を知った」という回答があり、本校とつながりのない、またはつながりの少ない方に知ってもらえるような販売活動やイベントをより積極的に行っていくことができるのではないかとご助言をいただいた。

本校生徒が、どんなことを特に印象強く感じてくれた、学んでくれたと思うかという問いには、「(木工製品作りの専門家から)何か掴もうという気持ち」、「集中して見てもらっている」、「楽しんでやっている」、「好奇心旺盛」、「前向き」という生徒たちの学びに対する姿が浮かび上がった。通常の学級の子供たちと比較して、「変わらない」、「同じ」であるという意見であった。

特別支援学校の生徒たちが地域とつながりながら学ぶことについて、自由回答で尋ねたところ、「自由にいろいろなものを作ってもいいのではないか」、「リアクションとか評価とかあると、またそれが(次に)やっていくことにつながる」、「本当は素晴らしい能力をもっている人たちだから、そこに価値を認められるような生き方があればいい」、「全く関わっていないのに、イメージで思われるよりであれば、実際に会って関わってどうなのかというのを、体験してもらえた方がイメージとしては変わってくる」、「時系列での方が、成長もより分かりやすい」などの意見をいただいた。

## V 考察と課題

### 1 考察

最初に、地域の方から教えてもらう機会を設定することで、生徒たちの学び意欲がより高まるのではないかという点について考える。木村木品製作所から招いた講師との3回の授業の振り返りで、「これからどんなことをがんばろうと思いましたか」という問いに対する生徒たちの回答で、それぞれの生徒が「〇〇をがんばりたい」、「できたことを他の製品作りに活かしてみたい」という「思い」が見られ、その後の作業への向き合い方に変化が見られた。

菊地(2021 p.10)は、『キャリア発達とは「本人のなかで起こる(意味付け)」ということや「他者との関係性(価値付け)」をとおして大事なことに気付いていく。「できるようにになりたい」、「いまはできないけれど、他のことができることをがんばりたい」、「できたことを〇〇に活かしてみたい」といった「思いの変化」や「内面の育ち」がキャリア発達といえる』と述べている。

また、菊地(2021 p.12)は、『授業において生徒が「できる・わかる」ために、教師は生徒が感じたことを価値付けていく必要があり、捉えにくいものほど問い、やりとりすることや、教師と児童生徒、児童生徒同士が互いに考えや気付きを共有していく過程が必要となる』と述べている。これは地域の方から教えてもらう機会を設定するだけでなく、その後の対話や振り返りが重要となることを示している。教師は、地域の方からの教えやアドバイスで生徒が感じたことを価値付けていく必要がある。

次に、地域の方から教えてもらう機会を設定することで、地域の方の特別支援学校に在籍する生徒への印象や意識が変化するかどうかについて考える。二人の講師へのインタビューに対する回答から、生徒たちに対する印象は、最初の授業から積極的に学ぼうとする良いイメージであったことが分かった。学びに対する姿は、通常の学級の子供たちと比較して、「変わらない」、「同じ」であると話されていた。二人の講師は本校生徒と授業で関わることによって、このような印象をもたれたと推察される。また、普段から学校種に関係なく、対等な横の関係性で、一緒に何かを創り出そうという意識であった。

一方で、「全く関わらずイメージで思われるよりは、実際に会って関わり、体験してもらった方がイメー

ジは変わってくる」という回答や、「地域と継続して関わる方が成長は分かりやすい」という意見もあった。地域の様々な人とつながる学習場面の設定の大切さや、地域の方と協働して授業する回数を適切に設定していく必要性が確認された。

## 2 課題

昨年度から、「生徒たちがプロデュースした地域の中にある作業学習」として、地域と協働した作業学習の授業実践を進めてきた。三省堂国語辞典第七版では、協働の意味を「同じ目的のために、力をあわせて働くこと」としている。今回の取組みでは、それぞれの「思い」の共有はある程度できていたと思うが、「目的」の共有を明確化するところまでは十分に至っていなかったのではないかと感じる。

菊地（2021 pp.12-13）は、『学校で行われる各授業において、① 本人にとって社会や将来のどのようなことにつながる「なぜ」「何のため」の学びかを明確にすること（そのための地域リソースの活用等を含む）、② 学んだ結果、本人が「どのようなことができるようになった」か、あるいは「どんなことができるようになりたい」と考えたかを捉え、本人にフィードバックしたり、授業等の改善に反映したりすること（学習評価）、③ 効果的な学びとなるよう、どの時期にどのような内容をつなぐ必要があるかを見直すこと（単元等の指導内容の配列）、④ ①～③について本人目線で可視化しつないでいくこと（個別の諸計画の活用と本人参加）が大事である』としている。

生徒たちの振り返りにあったように、生徒たちは自分たちが作った木工製品を地域の人たちに販売したいという「思い」をもっている。木村木品製作所から招いた講師は「作った物にリアクションとか評価とかあると、またそれが（次に）やっていくことにつながる」と話されていた。こうしたことを踏まえて、作業学習の年間指導計画の見直しや、授業の改善につなげていく必要性を感じた。

これらは学習指導要領において解説されている「カリキュラム・マネジメント」の側面と重なる。「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、生徒一人一人の「資質・能力」の育成を踏まえた「主体的・対話的で深い学び」の充実を目指すという視点から、作業学習を含めた授業の見直しと改善を図っていく必要があると思われる。

## VI 参考・引用文献

菊地一文（2021）「新学習指導要領とキャリア教育の充実」『小学部から組織的に取り組む「キャリア発達支援」の実践』千葉県立夷隅特別支援学校編著，ジアース教育新社，pp8-14.